（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　阿部　尚史

阿部尚史氏の学位請求論文『19 世紀イランの地方社会有力者の家・財産・相続』は、財産の形成と移転という人類に普遍的な現象に注目し、18～19 世紀のイラン西部地方の有力者の家系について、詳細なケーススタディーを行った結果をまとめたものである。

阿部氏は、そのイラン留学中に、国立公文書館の北西支部で、遺産相続に関わる契約文書や法的勧告（ファトワー）を多数含む「アミールキャビーリヤーン文書」と呼ばれる文書群を発見し、以後、この文書群の解読を進めるとともに他の多くの書簡や公文書、それに叙述史料を合わせ用いて、彼が「ナジャフコリー・ハーン家」と呼ぶアゼルバイジャン地方の名家の二世紀に亘る財産形成と移転行為を総合的、かつ綿密に研究し、解明しようとしてきた。本論文はその集大成である。歴史学研究としての本論文の意義は、大きく以下の４点にまとめられる。

１．これまで未使用だった大量のペルシア語文書史料の解読に基づき、実証的で緻密な論理展開が図られており、結果として得られたデータが明快で信頼に値する。

２．従来、イラン社会の特徴の一つとして、地方名家の継続性が指摘されてきたが、史料不足のために、その名家の財産が実際にどのように管理され、継承されたのかという点についての具体的な事例は存在しなかった。時代と地域が限定されるとはいえ、本論文は、一家系による財産管理と継承の具体例を詳細に示すことに成功し、この点でイラン史研究の深化に大きく貢献している。

３．ムスリム諸社会では、遺産相続は原則としてイスラーム法に基づいて行われるとされる。しかし、イスラーム法と地域的な慣行がどのように折り合って実際の遺産相続が行われてきたのかという点については、必ずしも信頼できる事例研究が存在しなかった。本論文で明らかにされたイスラーム法を柔軟に解釈した遺産相続のあり方は、今後の他のムスリム諸社会との比較研究において、貴重な基礎的データとして活用できる。

４．本論文は、一つの血縁集団の歴史を 100 年以上に亘ってたどり、詳細な分析と叙述を展開している。叙述の方法になお改良の余地があるとはいえ、きわめて具体的なミクロレベルの社会史研究の成果として評価できる興味深い作品に仕上がっている。

「地方有力者」や「家」といった基本的用語の概念規定に厳密さを欠く部分がある点、詳細な分析の背後にあるより大きな時代背景をさらに書き込む必要がある点、それに論旨の一部に議論の余地が残されている点など、口述試験ではいくつかの問題点が指摘された。しかし、これらは本論文の全体としての学術的な価値を大きく損なうものではない。よって、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を与えるに十分な内容を備えているものと判断した。